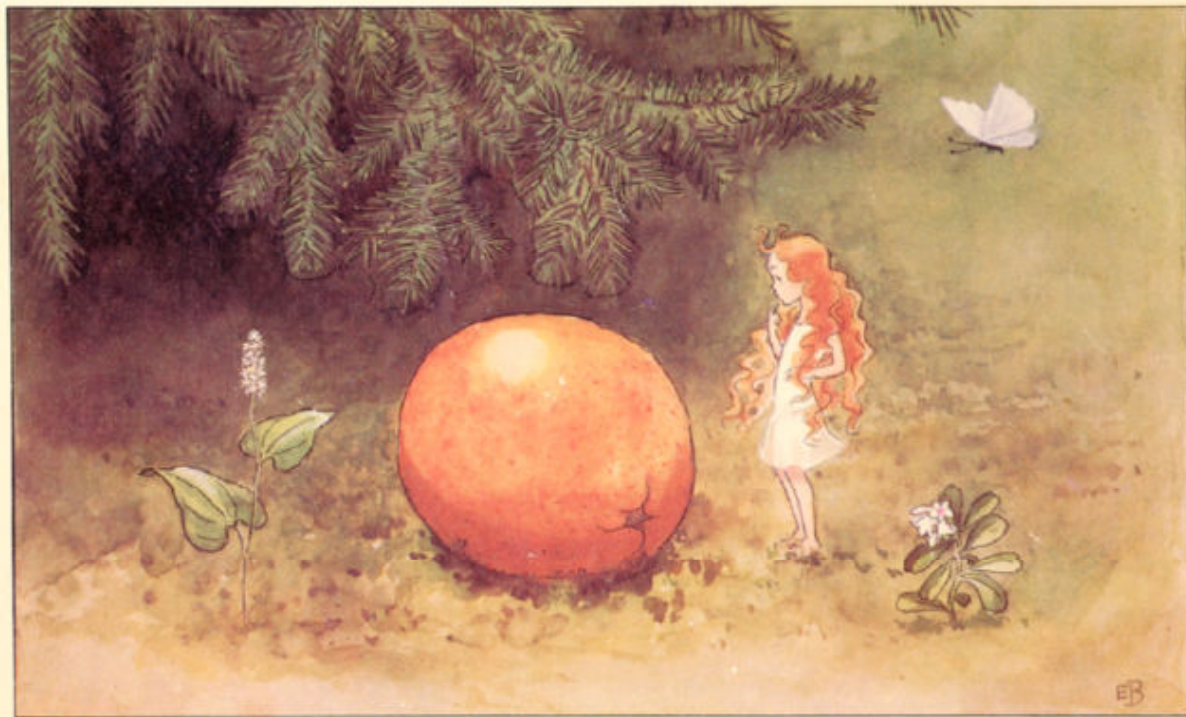


# おひさまのたまご



エルサ・ベスコフ の 絵本  
おおくぼ ゆう やく

# SOLÄGGET



## おひさまのたまご

エルサ・ベスコフ さく

おおくぼ ゆう やく



むかし あるところに ようせいの おんなのこが おりました。  
すまいは もりにある きのうち。 だいすきなのは おどること。  
はるに おどるのが 〈ようこそ おひさま〉、 あきにおどるの  
が 〈もみじ ぐるぐる〉、それから ふゆが 〈しらゆき しんしん〉、  
いつも さいごには ねむくなって きの おうちまで ふらふら、  
そのあと すやすや。

ところが なつは もりを あちこち とびはねて みてまわるのが たのしくて、  
だから ようせいちゃんも あんまり おどりません。

ようせいちゃんは もりの ことりたち みんなと とっても なかよし。 ふと  
めにはいった ちいさな たまご、 すとんと すから したの こけまで おちて  
きたのですが、 かかえて おおいそぎで よじのぼって ははどりに おとどけ。  
そんなことも あって ようせいちゃんは ことりさんたちの だいの おきにいり、  
とびきりの おうたも きかせてもらえます。





あるひ ようせいちゃんが もりをさんぽしていると、めに とびこんできたのが  
なにやら こがねいろの おおきくて まるいもの、 こけのうえに ちょこん。

「わっ、 なんて おおきな たまご！ いったい どこから きちゃったの？」と  
おもいまして、 まうえを のぞくと はるか そらたかくに くもの きれまが  
きらきら。「あっ、 あたし わかった。 かわいそうに おひさまが たまごを  
おっことしちゃって、 あいだに くもが あるから みつけらんないんだ！」

というわけで ようせいちゃんは ぴよんぴよんと このだいじけんを おともだちの  
ボックリへ しらせに かけてゆくのです。





ボックリは いけすかない おとこのこ。 えだに しがみつについて、 ようせい  
ちゃんを みかけると まつぼっくりを なげつけるものですから、 すってんころりん。  
「おまえって ほんと わるがきだな！」と ようせいちゃんも いらいら。「こんどまた  
なにか したら、 ネコゼに いいつけてやる！」

ネコゼじいさんは もりを まもっている こびとさんで、 ボックリが おそれる  
ただひとりのひと。

「つげぐちなんて ひきょうだぞ、 ひきょうだぞ！」と さげぶ ボックリ。

「ええ、 だから しないでいてあげる。 でも あたしの ひみつは おしえてやらない  
んだから！ いーだ、 ざんねんでした！」

と いいのこして、 ようせいちゃんは そこから スキップ、  
そこで あわてて きから とびおる ボックリ、 あとを おいかけ  
ます。 ついでに もっていくのが とがった きのとげに くさのくき、  
これさえ あれば ようせいちゃんに できたての きのみつを すって  
もらえますから、 たぶん なかなおりが できると ふみまして。 でも  
ほんとは きに あなを あけては いけないのです、 ネコゼが だめ  
だと いていましたから。







ようせいちゃんが まっすぐ むかったのは 〈けらけらガエル〉のところに、  
いけのほとりに すんでいました。 なんにでも わらうから そういう おなまえで、  
ちいさな ごはんやさんも していましたから、 おみせの なまえも おなじく  
〈けらけらガエル〉。 せきについていたのが おひるごはんに きた カタツムリと  
イモリ、 それから けらけらガエルの おともだち まんぷくガエルも ちゃんと  
すわって はこばれるのを まってまして、 そこへ ようせいちゃんが ぴよんぴよん  
やってきたのです。

「ようせいちゃん、 とれたての うみいも、 みずくさの たたきは いかが？」と  
あいそがいい けらけらガエル。「あら、 それとも さねのほうがいいかしら？」

「おかまいなく、 あたし おなかは いっぱいな、 だって けさ カタバミを  
まるまる たべたんだもん。 それよりも だいだいだいっ  
じけんを しらせにきたの！ おもってもみないこと！ なんと  
おひさまの うんだ たまごが、 もりの どまんなか  
おっこちちゃったの！」

これが けらけらガエルには すごく おもしろいことに  
おもえましたから、 ふきだしたのは いいのですが、 のどが  
つまりそうになってしまって まんぷくガエルに せなかを  
たたいてもらう はめに なりました。





ごはんやさん 〈けらけらガエル〉

ちゅうい!

おきやくさまどうして

ともぐいしないこと

EB

さて ようせいちゃんが みせようと さきにたって おひさまのたまごまで  
すすんでいくなか、 うしろから さらに どんどん ぞろぞろ。 ボックリも その  
おともだちの ツレも おいついて、 みんなが みんな おひさまのたまごに きょうみ  
しんしん。 はたして まのあたりにした みんな、 やっぱり おどろきを かくせません。  
「ぱっと たまごを かえす やりかたって ない？ そうしたら おひさま そのものが  
あたしたちのもの、 このもりも ずっと あかるいし。」と ようせいちゃん。

そこへ もみのきから ながめていた フクロウが。「ほっ、 おめでたいことだ。  
ほっほっほ、 そしたら わたしゃ ひっこしだな！」

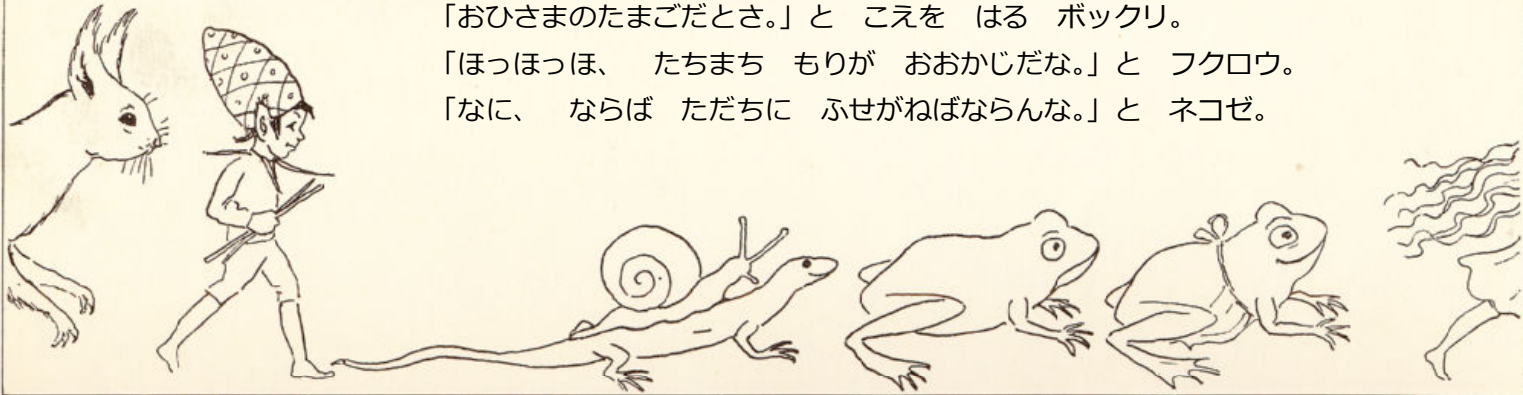
「ってことは、 そいつのなかに ひが あるのか。 だって おひさまって からだの  
なかに ひが あるんだろ。」と いったのは ボックリ。

「こんなところに あつまって なにごとじゃあ！」たずねたのは ネコぜじいさんです。  
のろのろと できるだけ いそいで つえを つきながら やってきたのでした。

「おひさまのたまごだとさ。」と こえを はる ボックリ。

「ほっほっほ、 たちまち もりが おおかじだな。」と フクロウ。

「なに、 ならば ただちに ふせがねばならんな。」と ネコぜ。





「いちばん いいのは かえッ、 かえッ、 かえッ……」

けらけらガエルが いおうとしたのは —— いちばん いいのは かえすとき  
みずにつけること、 なのですが ちょうど そのとき ふと おもったのです。  
おひさまの おこさまが かえったときに みずのなかでは ぼこぼこ わきたって  
しまうって。 なので ちからのかぎり おおわらい。

「なにが おかしいのだ。」いやな かおする ネコゼ。「ちからを あわせよ、 さすれば  
たまごを みずのなかまで ころがせようて！」

「でもさ からが ほら ぜんぜん あつくねえぜ。」と イモリは はなで くんくん。

「はは一ん、 こりゃ おひさまのたまごじゃなくて サッカーボールだな。」と こえを  
あげた ボックリが それを ひとけり。

「かってに けるなよ、 あたしの たまご！ おまえのせいで おひさまの  
ぼっちゃんが けがしたかも！」と ようせいちゃんが わめきます。

ところが もう ネコゼが ボックリの みみをつかんでいまして。

「もういっぺん たまごを うごかしてみろ、 ろうやに ぶちこむぞ。」

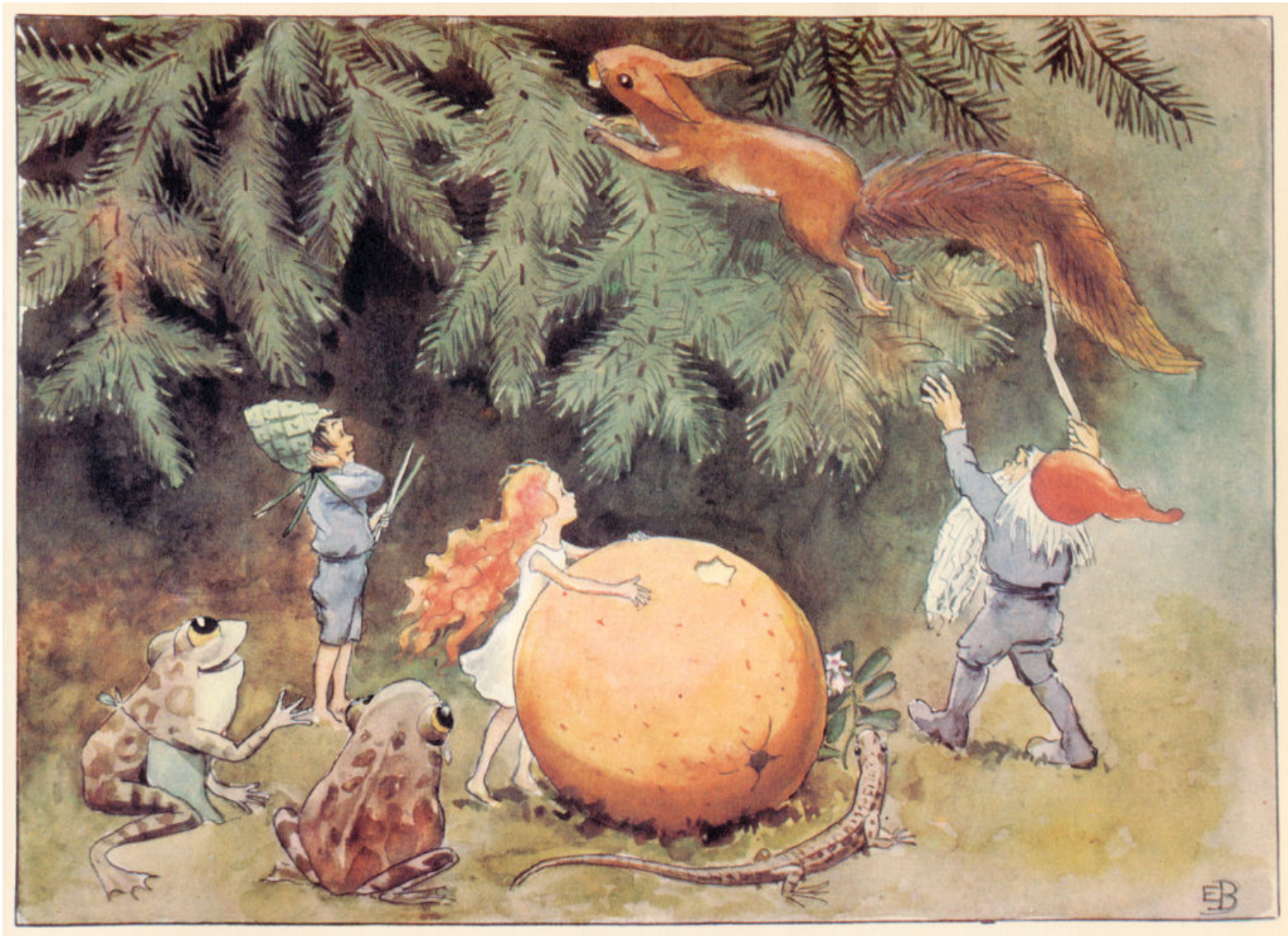
そのときです、 リスが がぶっと おひさまのたまごの からを  
ひとかみして、 そのまま きの上にとびあがりまして。

「うげ！」と はきだしたのです。「にがいったら ありやしねえ！」

「だれか てあてして！ あたしの たまご、 おひさまのたまごが！」

と われを わすれて わめきちらす ようせいちゃん。 それを  
きいた ズアオアトリくんが とんできます。





そして いうのです。「おっと、 ようせいちゃん、 それ おひさまのたまごじゃないよ。 おひさまのくだもの みたいなもので、 オレンジっていうんだ。 みたことあるよ、 おひさまのくにでは きに なんびやくと そういうのが ぶらさがってるんだ、 ぼくは ふゆを そこで すごすからね。 まつぼっくりみたいに、 みっしりとなってて、 なかには もう かくべつの ジュースが はいってるんだ。」

「なかみが ジュースだって?」と おおごえを あげる ボックリ。 さっと こがねいろの まんまるへ まわりこんで、 もってきた きのとげで あなを あけて くさのくきを つきさして すいこんだのです。

「うお、 うめえ!」と あじわいまして。「こんなに おいしいの はじめてだ!」

「なにを しておる!」と ネコゼが うなります。

なのに ボックリは ネコゼに あじみを すすめるばかり。 というわけで くさのくきを ほかのみんなにも わたしました。 そして みんなで かこんで いっせいにすっての かんそうは — 「おいしい!」 あんまり あたらなかったのが けらけらガエルで、 というのも ボックリに わきを くすぐられてしまって ジュースをちゃんと すえなかったのです。 ともかく せきばらいをして いうには —

「いいかい、 ようせいちゃん、 いつまでも ただで くわせてあげるから、 おみせで だすような ジュースを たるで もってきてくれないかい?」









ちょうどそこへ くいじの はった おおきな カラスが とんできました。  
つばさを はためかせて なきごえで びっくりさせて みんなを けちらしたのです。  
それから つめで オレンジをつかんで じぶんの すへ もってかえりまして。  
カラスの こどもたちも みんな くちを あけて ほしがったのですが、 くいじの  
はった カラスは けちでしたから いっきに オレンジを まるのみ、 のどに  
つかえて あとすこしで しぬところでした。 そんなことが あって くびを  
いためまして なつのあいだは ずっと ほうたい ぐるぐる、 もう なくことも  
できません。 まあ このカラスには いいことだったのかも！

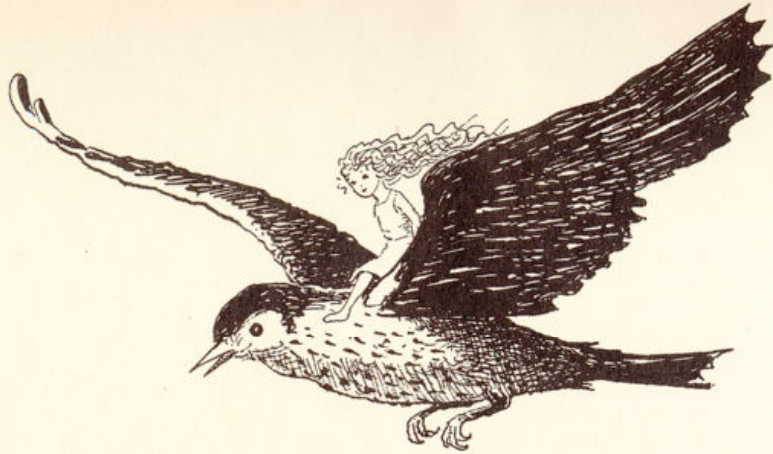


とはいえ ようせいちゃんは カラスに おひさまのくだものを とられて おおなき  
でした。 ツグミが こえを かけます。「なかないで、 ようせいちゃん。 ぼくと  
いっしょに おひさまのくにまで きてもいいよ。 そこなら すてきな おひさまの  
くだものも いっぱい きに なってるからさ！ きみは かなり かるいから、  
ぼくの せなかに うまく のれると おもうし。」

それを きいた ようせいちゃんは もう うれしくて、 もりじゅうを ぐるぐると  
おどりながら うたいました。「あたし おひさまのくにに ゆけるの、 おひさまの  
くにまで わたれるの！」







やがて あきに なりまして、 ようせいちゃん は ツグミ と いっしょに おひさまの  
くにまで いきます。 いまや ひざしのなか しあわせいっぱいにはしりまわって、  
ちょうちたちとも おうちの もりにいる なかまと おなじくらい なかよくなって。  
おなかが へったら もってきた くさのくきを おおきくて あまい おひさまの  
くだものに ひとつ さして のめばいいだけ。 でも レモンは のみません、 だって  
ようせいちゃんには どうも すっぱくて しかたがないから。

もし ふゆの どこかで ちょっと すかすかの オレンジに であっても、 がっかり  
しないでくださいね。 ようせいちゃんが ちょびっと ジュースを すった あのオレンジ  
なのかもしれませんし！ だとしたら おもしろいでしょう？

さて ようせいちゃん とっても たのしく すごしながら、 それでも まいにち  
おひさまに むかって いうのです。「ねえ おひさま、 はやく おうちの もりで  
きらきらしてよね、 そうしたら すぐにでも はるに なるし！」



というのも ようせいちゃん はるに なったら ツグミに おうちの もりへ つれて  
かえってもらおうと かんがえていました。 やくそくだったのです、 だって ちゃんと  
〈ようこそ おひさま〉を おどらないと アネモネが 出てきてくれませんし。

ネコゼも ボックリも ようせいちゃん もどってきてと つよく ねがっていました。  
なんども うろついては ツグミが こないかと めを うごかすのです。 ネコゼが  
ボックリに いいました。「ばかもんが、 ボックリ、 わかっておるだろ、 こんな  
ふゆの どまんなかに ツグミは とんでこんと！」 と いくつか ネコゼも ついつい  
ようせいちゃんを さがしてしまつて。 いちめん ゆきなのにね。

ですから とうとう かえってきた ひには、 みんなは もう うれしくて、  
そう もう うれしくて、 もりじゅうの みんなが でんぐりがえり！







さて この おはなしの そのものの はじまりですが、 ラッセという おとこのこが  
なつ のいちごを さがしに でかけて たまたま もりで おおきな オレンジを  
おっことした、 それだけだった ということも おわすれなく。



Original Text: *Solägget* (1932)  
Original Author: Elsa Beskow (1874-1953)

### おひさまのたまご

自作PDF版 2012年6月2日 第1版発行  
2012年6月14日 微修正

作者 : エルサ・ベスコフ  
訳者 : 大久保ゆう

訳者twitter : @bsbakery  
訳者サイト : <http://www.alz.jp/221b/>

発行 : ALZ  
発行元情報 : <http://www.alz.jp/> & <http://p.booklog.jp/users/alz/profile>

※この翻訳は「クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本 ライセンス」  
(<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>) によって公開されています。  
上記のライセンスに従って、訳者に断りなく自由に利用・複製・再配布することができます。